

日本の説話

3

中世 I

永井義憲・貴志正造編



東京美術

略省印檢

日本の説話

第3巻 中世Ⅰ

定価 一、六〇〇円

昭和四十八年十月十五日 印刷
昭和四十八年十一月十日 発行

編者

永井義憲
貴志正造

発行者

佐々藤雄

発行所

東京美術

東京都千代田区神田司町二ノ七

電話二九二・三二三（大代表）

振替東京一三八六 一九七三〇

印刷／東京美術

製本／美成社

落丁・乱丁はお取替致します。

目次

中世における説話文芸の原点

中世説話の性格

小西 甚一 1

仏教と説話文学

伊藤 博之 32

法語と説話

菊地 良一 53

唱導と説話

小林 智昭 72

靈驗譚の蒐集

永井 義憲 91

——観音と地藏——

宝物集の世界

山根 賢吉 103

ひじりと説話文学

麻原 美子 124

——『発心集』の世界——

撰集抄の世界

貴志 正造 158

人間、この不浄なるもの

稲垣 泰一 199

——『閑居の友』にみる不浄の思想——

小林 保治 226

無住の世界

三木紀人 246

——『沙石集』『雑談集』——

説話の類聚と編者

安藤直太郎 276

——『私聚百因縁集』と『三国伝記』——

神々と語り物

福田 晃 302

——『曾我物語』をめぐって——

日記文学と説話文学

松本寧至 336

——『とはすがたり』『有明』像

の造形をめぐって——

説話文学と絵巻

宮 次男 361

——説話絵巻の展開——

説話と絵解

庵 途 巖 392

説話と仏教歌謡

新聞進一 428

中世における説話文芸の原点

小西 甚一

説話と説話文芸

説話文芸の特性

いわゆる中世説話文芸が『今昔物語集』を起点とすることは、研究者の間であまり異論を見ないようである。なぜならば、それ以前の説話集に比し『今昔物語集』が題材の多様さや語りぐちの新鮮さで独自の境地をひらいていることは明らかであり、とくに本朝世俗部の諸話をもつ庶民的平俗性は、人間を行動的にとらえたものとして、研究者の高く評価するところであった。⁽¹⁾この、人間をいきいきと描き出す語りぐちは、民衆の生活に根ざす口承説話が、作品としての説話文芸に粗野ながらも力づよい創造性を与えた結果であるとされ、そこに『今昔物語集』の特色を見ようとするのが、おそらく従来の通説めいた考えかたであつたろう。

右のような意見は、かならずしも全体的に不適當というわけでないが、通説として定着するまでには、なお検討を要する点が少なくないと思われる。すなわち、

(1) 『今昔物語集』およびその同類説話集に収められている篇章は、すべて「説話文芸」と認めてよいか、どうか。

(2) いわゆる庶民的平俗性を、これら説話集の主要な特色と認め、それに基づき批評してよいか、どうか。

(3) これら説話集に見られる語りぐちは、はたして「口承的」であるか、どうか。

などがその主要なもので、いずれも、かなり複雑な問題が含まれている。

説話と説話文芸

口頭で語り伝えられた説話のすべてが現代人のいう文芸性をもつとは認めがたいし、語り伝えを記録した文献がすなわち説話文芸であるとも決められない。説話と説話文芸とは、いちおう区別したうえで、両者の関連をとらえてゆくのが、いちばん適切な態度であろう。何を「説話文芸」と称するかは、多く「文芸」の定義に関わることであるけれども、しばらく「説話に基づきながら、興趣の豊かさをもち、事件や人間がいきいきと描かれている篇章」を説話文芸と考えることにしてみよう。このような意味での説話文芸は、はたして『今昔物語集』および同類の説話集のなかで、どれだけの分量をしめるのであろうか。

興趣の豊かさとか描きかたの生彩とかは、程度の問題であり、どこまでが「いきいきとした描きか

た」なのかを明示することは、もちろん不可能であるけれども、もし近代小説に見られるような性質の興趣とか描きかたの生彩とかを標準にするならば、説話文芸と称してさしつかえない篇章は、おそらく『今昔物語集』のなかに多くはないはずである。巻二二から巻三一までの十巻は、史談のほか芸能談・怪異談・雑事談などを収録したもので、これらの巻はわりあい説話文芸としての性質が豊かであるけれども、それでさえ

勝負する事はあるまじかりける事なりと、世の人謗り申しけるとなむ、語り伝へたとや（巻二・第三・第二五話）。

きはめて怖しき事なり。宿報すくはうとは云ひ乍らなが、よく慎しむべしとなむ、語り伝へたとや（巻二四・第一八話）。

あやしき者どもの心ばへなりかし。兵つはものの心ばへは、此かくぞありけるとなむ、語り伝へたとや（巻二五・第二二話）。

然れば、世の人、なほ人のためには吉よく当たりおくべき事なりとなむ、語り伝へたとや（巻二六・第一八話）。

これによりて、さやうならむ所には、独ひとりまには立ち入るまじき事なりとなむ、語り伝へたとや（巻二七・第一五話）。

などのごとく、教訓的な言辭で結ばれることが多く、そうでなくても、たいいてい話の全体から教訓的

な筋あいが表示されている。すなわち、話の内容や語りぐちの「おもしろさ」を賞翫するだけでなく、それらの話がもつ教訓性をも重視しており、いわば実用知識・世間学・政道論などが文芸と未分化の状態ですらわれているのである。そういった未分化の状態から、現代人が興味ありと感ずる点を抽出するならば、巻二二から巻三一までにその要素が多いことになる。

同じ『今昔物語集』でも、巻一以下のおよそ二十巻には釈教談が優勢であり、世俗的な興趣の乏しいその内容からも、あまり感動的ではない語りぐちからも、現代人のいう文芸性は多くのばあい受けとられない。これは、かならずしも『今昔物語集』だけでなく、十二世紀から十三世紀にかけての説話集全体を通じて、おそらく三分の二は釈教談に属する篇章であつて、もし「興趣の豊かさ」をもち、事件や人間がいきいきと描かれている」ことを文芸の基本資格とするならば、これら説話集のなかに説話文芸はそれほど多く存在しないというべきであろう。説話集に収められた篇章の幾つかを現代人が「文芸」だと認めるのは自由であるけれども、それと、説話集の編者たちがいわゆる説話文芸を集成するつもりだったか否かと、別の次元に属することなのである。

そもそも古代においては、宗教も政治も歴史も芸術も未分化であつた。それが、文化の中心圏では次第に分化してゆき、八世紀には和歌が、十世紀には物語が、文芸という意識のもとで制作されるにいたったけれども、この事実、あらゆるジャンルが併行的に文芸として制作されたことを意味するものではない。歴史的世界の周辺には、中心圏ですでに文芸が独立している時期でありながら、いま

だに宗教・政治・歴史などの融合した、いわば未分化なジャンルが残っており、説話はその代表的な例なのである。未分化なうちにも、説話が多かれ少なかれ文芸性を溶けこませている以上、われわれがその文芸性をとらえることは可能であるし、文芸性のとくに豊かな篇章を説話文芸と称することも許されよう。しかし、それは、あくまでも現代人の立場から観察するときのことであり、中世において「説話文芸」が制作されたというのと同じではない。説話集の編者たちは、宗教・政治・歴史・芸術などのまだよく分化していない説話作品を、分化させようという明確な意識もなく、在るに従って集成したにすぎず、現代人のもつ「文芸」を当てはめようとしても、それで全体的に割り切れるはずがない。

世事談と奇事異聞

いわゆる説話文芸の特色を庶民的平俗性においてとらえようとする立場は、暗黙のようとする態度が前提とされていた。しかし、中世の説話集が「文芸」以外の要素を多分にもつ以上、右の考えかたは少なからぬ修正を必要とするであろう。たしかに『今昔物語集』などを批評するとき、庶民的な平俗性を無視するわけにはゆかないけれども、それは現代人の立場からそう考えられるということなのであって、十二世紀ごろの人たちが同様な立場のもとに『今昔物語集』などを編んだとは、かならずしも決められない。雑多平俗な民衆の活動をいきいきと描出している点は、まさしく現代人の共感を呼ぶのであるが、それは『今昔物語集』などの編者たちないし享受者たちが同じ性

質の共感をもってそれぞれの篇章に対したか否かとは、おのずから別の問題なのである。

もし説話集の編者たちが庶民の生活に魅力を感じ、その描出を主要な関心事としたのであれば、説話集はそういった種類の篇章が多数をしめるはずであるのに、前述のごとく、世事談は説話集のなかでかならずしも量的に優勢でないし、世事談に属する篇章を見ても、はたして庶民性そのものへの共感が述作の動機になっているかどうかは疑わしい。『今昔物語集』所見の世事談でいえば、

これまた希有の事なり。昔の人は、此かる奇異の事どもを見頭はす人どもなむ有りけると語り伝へたるとや（巻二四・第一話）。

内にもこの由を聞こしめして、いみじく奇異がらせたまひけり（巻二四・第六話）。

此様に希有の事ども多かりとなむ、語り伝ふる（巻二四・第一六話）。

これ、奇異の事どもなりとなむ、語り伝へたるとや（巻二四・第二四話）。

まことにこれ、有り難く奇異き事なりかし（巻二六・第一話）。

これを聞く人、隣の国まで奇異に思ひけり（巻二六・第三話）。

これを見て、驚き怪しみ、哀れがりけり（巻二六・第二〇話）。

其の時の人、皆これを聞きて、此なむ怪しび疑ひけるとなむ、語り伝へたるとや（巻二七・第三話）。

まことにこれ、希有の事とぞ、其の時の人云ひける（巻二七・第二二話）。

かく奇異き事なむ有りけるとなむ、語り伝へたとや（卷二七・第三二話）。

世の末にも此^かかる希有の事は有りけり（卷二七・第三七話）。

これは利延が語りしなり。希有の事なればかく語り伝へたとや（卷二七・第四二話）。

まことは何^{なん}なる鼻にかありけむ。いと奇異^{あさまし}かりける鼻なり（卷二八・第二〇話）。

これを思ふに、きはめて恠^なしき事なり（卷二八・第二八話）。

希有の事なれば、かく語り伝へたとや（卷二八・第三九話）。

希有の事なれば、かく語り伝へたとや（卷二八・第四四話）。

これ、世の希有の事なれば、かく語り伝へたとや（卷二八・第三三話）。

此^かかる希有の事なむありけるとなむ、語り伝へたとや（卷二九・第三三話）。

此^かかる希有の事なれば、かく語り伝へたとや（卷三一・第三三話）。

これ希有の事なりとなむ、語り伝へたとや（卷三一・第三七話）。

のごとく、しばしば「希有」「奇異」「恠し」などの語を伴う結びが見られ、ほとんど定型めいた印象さえ与えるが、これは、世事談が多くは異事・奇聞として扱われたことを意味するのではなからうか。とくに「希有」「奇異」「恠し」など記されていないいばあいでも、語りぐちを検討すると、世事談がだいたい異常な事件についての興味を焦点としており、それにさまざまな種類の教訓性が加味されたものであることは、きわめて明瞭だと思われる。

この事実を別の面からいえば、説話集の編者たちは、異常な事件を題材とする語り伝えの採集に興味を抱いたか、それにある種の意義を認めたか、いずれかの理由で収録したのであるうけれども、異常な事件は、貴族社会の内部で見聞することのほかに、貴族たちにとって疎遠な庶民社会でのほうがむしろ多く存在した。というよりも、庶民たちにとってはそれほど希有でもなければ奇異でもない事実が、貴族の意識からはきわめて異常に感じられるばあいも多かったはずで、説話集に収められる世事談は、おもに異聞を採録するつもりだったのが、結果的に庶民層の語り伝えを多く素材とすることになったものであろう。

説話と口頭表現性 次に、庶民層での語り伝えは口承によったはずであるとする立場から、いわゆる中

世説話集に収められた篇章の表現をも、口承性に基づいて特色づけようとする試みが、従来なされている。しかし、その「口承」が意味するところは、かならずしも明確でなく、おそらく「口承」と「口誦」（口演）とが混同された結果ではないかと思われる。

これは、従来、西欧の研究者の間でも同様であり、いわゆる oral art ないし oral literature の意味内容はきわめて漠然としていたが、一九三五年、ミルマン・パリイがユーゴスラヴィアのエピックを現地調査した成果に基づき、oral composition の実態を明らかにしたことは、画期的な発見であった。パリイによれば、ホメーロスの『イーリアス』および『オデュッセイア』に反覆して現れる定型的な詞句は、それらが聴衆の前で口誦されるプロセスのなかで制作されたことの証迹にほかなら

ず、このような制作方法は現代でもユーゴスラヴィアのエピックに生きているのである。すなわち、エピックは「語りながら作る」ことが基本的な原則であって、これを oral composition と称する。パリの学説は非常に高く評価されており、時としては「ホメーロス研究におけるダーウィン」とまで言われる。³⁾

もっとも、いくら「語りながら作る」といっても、すべてのエピックが吟誦するたびごとの新作なのではなく、既存の詞章を耳から伝承し、それを吟誦することも多いが、記憶に依存する限り、多かれ少なかれ辞句の変動は免れないのであって、そのために在来³の形と差を生じた部分は、吟誦者が語りながら作った結果になっている。この際、吟誦しながら制作するのを「誦作」(oral composition)とよぶならば、文字表現を介して制作されるのを「筆作」(writing composition)とよび、区別すべきであろう。また、既存の詞章が口頭で語り伝えられるとき、これを「口承」(oral transmission)とよぶことにすれば、文書によって詞章が伝えられるのは「書承」(literal transmission)とよぶことになる。さらに、口誦・口演される詞章を聴衆が耳から享受するのは「聴受」(auditory appreciation)、文書に記載された詞章を眼で享受するのは「視受」(visual appreciation)とよぶことにしたい。

これらの区別を『今昔物語集』などに当てはめると、従来「口承性」といわれていた事実は、制作プロセスにはわりあい稀薄なようである。まず『今昔物語集』の篇章がすべて筆作であることは、疑

う余地がなからう。例の「……となむ、語り伝へたとや」という結尾は、その素材が口承説話であることを示すだけの意味にすぎず、聴衆を前に口演しながらその場で制作したものとは認められない。『今昔物語集』には、

今は昔、□□天皇の御代に、内記慶滋の保胤といふ者ありけり。実には陰陽師賀茂の忠行が子なり。而るに、□□といふ博士の養子となりて、姓を改めて慶滋とす（卷一九・第三話）。

今は昔、大和国□□郡に住む人ありけり（卷二〇・第二八話）。

其の大納言の御妻に、在原の□□といふ人の娘ありけり（卷二二・第八話）。

陰陽師天文博士弓削是雄といふ者を請じ下して、大属星を敬ましめむとする間、是雄、かの□□と同宿しぬ。是雄□□に問ひて云く「汝、何れの所より来たるぞ」と。□□答へて云く「我、穀藏院の封戸を徴らむが為に、東国に下りて、今返り上れるなり」と（卷二四・第一四話）。

などのごとく、すべての伝本に共通する關文があり、固有名詞に当たる部分が關文になっているものについては、編著に際して不確かなのを後から埋めるつもりで記さなかったと認められる。これは、筆作でなければ生じえない現象である。また、これらの篇章が筆作されるとき材料になった説話も、多くは筆作であつたと認められる。同じ内容の篇章が他の説話集にもしばしば現われるのは、先行文献を材料としたことを示すものである。

現存の説話集に収められている篇章は、説話を素材とする作品なのであり、説話そのものとは同じ

でない。語り伝えられる説話が『今昔物語集』などの篇章と別ものであることは、口頭の「歌語り」が『伊勢物語』や『大和物語』の各段と一致するわけでないのと同様であり、説話集が原則的に視受を前提として編述されたものと認められることも、注目を要するところであらう。

中世説話集と「小説」

説話集と集成意識 以上に述べてきた諸点を総括すれば、通説のごとく『今昔物語集』あたりから説話集が従来と違った特色を示すようになったことは確かだとしても、現代的な意味で

の文芸性がまだ分化しきらず、むしろ教訓性が顕著であり、口承説話が素材となった篇章も少なくないけれど、説話集に収められているのは貴族層に属する知識人が筆作したものと認められ、その採録も庶民性を高く評価した結果ではない——といったようなことになる。では、あれほどの分量をもつ『今昔物語集』などは、どのような意識ないし志向のもとに編述されたのであろうか。明確な志向が無ければ、三二巻にも及ぶ説話集をまとめることは不可能だったにちがいない。『今昔物語集』のばあい、すでに作品として存在する篇章をたんに寄せ集めたのではなく、編纂に際し新しく筆作したり在来の記載説話を書き直したり、著作活動に近いようなプロセスがあったと思われるから、そうした作業を支える何かの方向性が無かったはずはあるまい。

十二世紀にいたり『今昔物語集』のごとき大冊の説話集が編述されたことについては、まず、当時